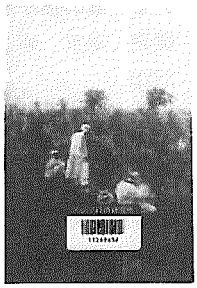
資料紹介

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

田中真知著　**アフリカ旅物語 北東部編**　<新装版>　東京 凱風社　1995年　286p.



この本は，アフリカ大陸北東部（エジプト，スーダン，エチオピア，ケニア，ウガンダなど）についての旅行記である。著者は現在エジプト・カイロ在住のフリーライターで，1985年にスーダンを訪れて以来，アフリカへの旅を重ねている。

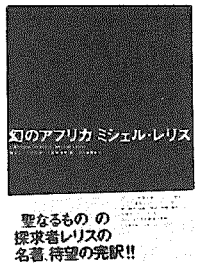
本書は著者の狙いどおり，雄大な自然，陽気な人々，または飢餓といったステロタイプなアフリカ像を確認して終わる見物記などではなく，違った切り口でアフリカの人々の姿を見せてくれる。しばらく住みついてしまったスーダンの部分だけではなく，他の国々でも，文化人類学者，大道芸人，新興宗教の信者，怪しげなガイドといった人々の案内により，ふつうの旅では経験できないところへ著者は飛び込んでいる。

特に，スーダンで住みついていた村の話は，著者の「愛」が感じられる。5年後スーダンを再訪してその村が内戦状態になっていると知り，外からの力に翻弄されている村の人々に思いをはせるくだりでは，著者の哀惜の念が伝わってくる。

それ以外の国々でも，出会った人の生活や価値観と，日本人としての彼の思いが絡み合いながら話がつづられていて，ふつうの旅行記にはない深みを感じさせてくれる。さまざまな人が，出会ったばかりの人と話しているとは思えないほど率直に自分のことを「語って」いる。これは，アフリカ人とか日本人とかを問わず，その人を理解したいという著者の真摯な態度によるものではないだろうか。行ったことのない人でも，アフリカの人々に思いを寄せることのできる本である。

北東部編の他に，中南部編もある（ザイール，ボツワナ，ナミビア，南アフリカ）。ここでもアフリカの人々を見つめる著者の態度は変わっていない。特に奥さんとのザイール河下りの話は，「冒険記」風でありながら，沿岸の人々を生き生きと描写している。　（児玉由佳）

ミシェル・レリス著　**幻のアフリカ**　岡谷公二他訳　東京 河出書房新社 1994年 570p.



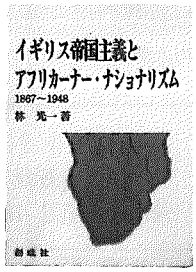
1931年から33年にかけて，レリスは著名な民族学者グリオールらとともにダカールからジブチに至るアフリカ横断調査行に秘書兼文書係として参加した。彼は文書係の職責として調査の公的な記録を残すことになったが，「最大限の主観性を通じて，人は客観性に到達する」という信念と戦略に基づいて毎日の日記を執筆した。それが本書である。

本書の中身はきわめて豊饒であり，矛盾に満ちている。優れた民族学的資料でありながら調査の名の下に行なわれた蛮行を告発し，フランスの公的な調査団の報告書でありながら植民地主義を激しく嫌悪し，アフリカ人に深い連帯感を表明したかと思えば金目当てにすり寄ってくるインフォーマントを罵倒する。ここに記されているのは，アフリカでレリスの魂が発した叫びそのものである。

自らの弱さまで意識的にさらけ出した彼の記録は，執筆後半世紀以上を経た今日なお生々しい。それはおそらくレリスの叫びが，外国人研究者という中途半端な身分でアフリカに滞在した私の葛藤と共鳴するからだろう。私もまた調査の名の下にアフリカ人を「尋問」し，その謝礼として金を支払い，彼らの欲得づくの行動を嫌悪し，にもかかわらず名状し難い魅力をそこに感じた者の一人だからである。だから本書でレリスが発する心情の吐露は，私にとって癒しの泉であった。

しかし，この泉の水はそれほど甘くはない。彼はすぐさま切先をこちらに向けるからだ。お前はどのように決着をつけるつもりかと。アフリカで抱いたさまざまな感情を抑制して，上澄みの部分だけをストイックに世に問うていくのか。あるいは己の恥部までさらけ出すことを潔しとするのか。本書の出版によって瓦解したグリオールとレリスの友情さながらに，私の思いも千々に乱れつつある。　（武内進一）

林光一著　**イギリス帝国主義とアフリカーナー・ナショナリズム1867～1948**　東京　創成社　1995年　179p.



民主化後南アフリカの行方に血肉の籠もった情緒を抱えて携わっている民族集団がいる。それが，白い肌をもったアフリカ人アフリカーナーである。著者は，アパルトヘイトとは「アフリカーナー・ナショナリズムの具体的な表現形態」でもあるといっている。異論のないところだろう。本書は，そのアフリカーナー・ナショナリズムがアパルトヘイトに結びつくまでの前史を，イギリス帝国主義との相克から説き起こしている。

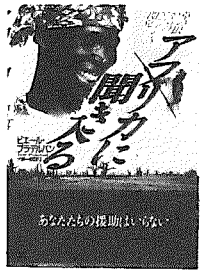
第1章から3章までは南アにおけるイギリス帝国主義の進展が主題である。南アでダイヤモンドと金が発見された後，イギリスの対応が急速に帝国主義化していってやがて土足の進出に到る過程を，主に歴代の植民地官僚に焦点をあてて述べている。著者自身の見解は些か見え難いが，帝国主義への契機を植民地側の事情に求めようとする陣営に属するといえようか。ロビンソン＝ギャラハー(本書ではギャラガーとあるが？)の戦略拠点確保説に対する批判も垣間見えるが，本書がとっている方法は，同時代人の意識を分析の縁とするオフィシャル・マインド論のように思われる。つまり経済決定論をとっていないわけで，大議論としてはロビンソン＝ギャラハーの帝国主義テーゼに沿っているとも見える。いずれにしろ，議論全体の枠組みを理論的に明確化する余地がいまだ残されているように思う。

第4章以下はアフリカーナー・ナショナリズムを扱っている。オランダの新カルヴィン主義がもたらした影響の根深さが幾筋かにわたって論述されており，たいへん勉強になった。この辺が著者の真骨頂だろうか。今後さらなる展開に結び付けて頂きたい。

ところで，本文中にかっこ付きで出てくる原語のうち，英語のものの幾つかについて，これは本来アフリカーンス語ではなかろうかと首を捻った。単語を中黒点で繋げるのも奇妙に映る。また，各章で記述と注が再三にわたって重複する。整理する必要があった。

(平野克己)

ピエール・プラデルバン著　犬飼一郎訳　**アフリカに聞き入る－草の根からのアフリカ開発**　東京　めこん　1995年　322p.



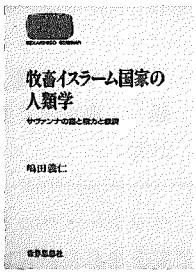
あえてジャンル分けをするならば，本書はルポルタージュに分類されるであろう。スイス人で長年アフリカの開発問題に取り組んできた著者が，1987年に4カ月半をかけてセネガル，マリ，ブルキナファソ，ジンバブエ，ケニアの5カ国を回り，111の村落で行なったインタビューに基づいて構成されたのが本書である。サヘル地域を中心に取材された内容は，さぞや厳しいものと思われるのだが，意外やサクセス・ストーリー中心で，しかも建設的かつ楽観的なコメントに終始している。著者自身が緒言でも述べているように，本書は画一的な手法によらず，「個人の主観的ビジョン」として開発の諸問題を論じた報告書なのである。

本書執筆の契機，したがって著者の調査行の出発点となったのは，アフリカのユニークな農民団体である6－S協会（「サバンナとサヘルでの乾期を利用する」を意味する仏語の六つの頭文字）の総会への参加であった。サヘル地域9カ国で3500余のグループ，約20万人を擁する同協会の国際ネットワークが13章にわたって展開される豊富なトピックの源泉である。6－S協会については第6章に詳述されており，著者はその弱点を踏まえつつ，なおその可能性を高く評価している。農民への信頼を基盤として，その創造性を引き出すという6－Sの発想は，本書の全編を貫くメッセージでもある。

もっとも最初から読み通すと，系統的とは言い難い章立てと，これでもかこれでもかと繰り出される事例に少々辟易するのも正直な感想である。アフリカ経験の豊かな訳者ですら「チーズホンデューをたて続けに味わっているような」感じを抱いたというから，一般の読者であればなおさらだろう。本書の一つの読み方として，まず関心のある箇所から手をつける，いわばつまみ食いを奨める所以である。

(望月克哉)

嶋田義仁著　**牧畜イスラーム国家の人類学－サヴァンナの富と権力と救済**　京都　世界思想社 1995年 299＋xxvp.



本書のタイトルにある「牧畜イスラーム国家」をイメージするのは少々難しい。牧畜民ないしは遊牧民の国家形成と言えば，世界史上の重要テーマではあるが，その今日的意義は奈辺にあるのか。しかもイスラームとなれば，世界観・宗教観の上でもわれわれとは距離があり，読者としてのとまどいは如何ともしがたい。

ところが筆者はこれを予想していたと見え，研究史の交錯点に位置する本書の特徴を明示するのみならず，序章においてアフリカ牧畜民によるイスラーム国家形成運動を跡づけ，以後の議論の展開をも予告するのである。こうした十分なお膳立ての後に，読者は現存する「牧畜イスラーム国家」である北カメルーンのレイ・ブーバ王国に引き合わされ，その事例研究とモデル形成の作業に巻き込まれてしまう。

本論の前半で取り上げられる「フルベ族の聖戦」や「ドレイ（奴隷）制」は西アフリカの歴史や社会に関心を持つ者に必須のテーマであるが，本書はこれらを超部族的な支配体制，イスラーム国家形成という観点から捉え直している。さらに後半では経済面に目を転じ，イスラーム支配の基盤にあるのがドレイ経済ではなく「ウシ（牛）経済」であると論じ，「牧畜イスラーム国家」の基幹にはイスラームとサヴァンナにおける卓越した財である衣服とウシの文化複合（コンプレックス）が存在したと結んでいる。

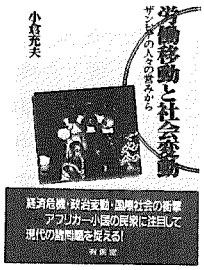
上述した構成面での親切さに加えて，理解をたすけている豊富な図表，説明的な注，さらに整った索引と参考文献リストなど，至れり尽くせりの内容ではある。ただ凡庸な読者の一人としては，3ページ弱の結語にとどめることなく，だめ押しの結論がほしかった気がする。サヴァンナ社会のダイナミズム，そこでの部族関係の変化，そして超部族的な支配の成立について，モデルを再提示してほしかった，と望んでは欲の張りすぎであろうか。　（望月克哉）

レナード・トンプソン著　宮本正興・吉國恒雄・峯陽一訳　**南アフリカの歴史**　東京　明石書店 1995年 vii＋576p.

南アフリカ史はこれまで数多く書かれてきた。代表的なものとしては，G・M・シール，デ・キービィート，E・A・ウォーカー，T・R・H・ダベンポート，それにオックスフォード版の2冊本などがあるが，それらに比べ本書はどのように位置づけられるのか。一口に言えば，本書は自由主義歴史学派の代表作と言えよう。C・F・J・ミュラーの500年史は論外として，本書の出現以前の南ア歴史研究はネオ・マルクシスト派と自由主義学派の対立に彩られてきた。前者は反アパルトヘイト運動と結びつきイデオロギーが優先した。それに対し，後者はそれまで無視されてきたアフリカ人社会の歴史を掘り起こし，入植者の歴史として書かれてきた南アフリカ史をアフリカ人社会の歴史も含めて総体的に把えたところにその特徴がある。このことは本書の構成をみてもあきらかで，まず植民地以前のアフリカ人社会の特徴を描き，ついで白人の侵略によってアフリカ人社会がいかに変容したか，また，鉱山開発によりアフリカ人が労働力としていかに使われてきたかを明らかにしている。さらに南ア連邦の成立により隔離と差別が始まり，第2次世界大戦後それがアパルトヘイトという形で発展していく過程，それに対してアフリカ人がいかに抵抗したかを明らかにしている。そして最後にソウェト蜂起以降，アパルトヘイトが解体していく過程を描いている。

訳者の一人峯氏による巻末の解説は，南アフリカ史研究の現状をよくまとめており，南アフリカ史を研究する者にとって大変有用である。　（林　晃史）

小倉充夫著　**労働移動と社会変動ーザンビアの人々の営みからー**　東京　有信堂　1995年　200p.



労働移動と社会変動は鶏と卵のような関係と著者はいう。労働移動によって社会が変動するし，社会変動によって労働移動がひき起こされる。人は本来定住するもの。それが必要に応じて移動する。その「必要」がわかれば，移動が引き起こす社会の変化も理解できよう。著者はたびたびザンビアを訪れ，調査を続けているが，視界はボーダーレス。世界の最貧国に属するザンビア社会の分析を通して，広くアフリカ社会に共通する問題を理解し，アジア中進国との比較も視野におく。また著者は，地域研究に社会学的視点を加えたいとつねづね考えてきた。その過程で社会学の枠を拡げ得るのではないかと。

そのこころみでもある本書は，ザンビアの労働移動と社会変動の背景に大きくのしかかる経済危機が深まった70年代後半から，1991年カウンダ政権交代までの時期を扱う。二部から成り，第一部「労働移動」で，著者の関心はとくに都市に向けられる（首都ルサカ，鉱山都市ムフリラ，そして送り出し側農村）。第二部「政治変動」では，労働移動のバックグランドである農村部の地域性に注目，独立以後の政治変動（複数政党制→一党制→複数政党制）が地域的支持の変化に基づいていることを明かにする。

タイトルは労働移動となっているが，内容からはもう少し拡がった印象を受けるのは，複数の論文を加えた構成によると思われる。だが，民衆の生活感覚，政治感覚を社会変動のカギとする著者の社会学者としての目は一貫している。経済危機のなかで，彼らの生活をさらに深く世界経済の枠組の中にとり込もうとする国際金融組織，保身に回る政治家や官僚に抗して，あるいは彼らを出しぬいて，生活防衛や民主化実現のために主体性をもった民衆が「主権者」として登場しつつあるという印象でしめくくられている。（丹埜靖子）

ベッシー・ヘッド著　楠瀬佳子訳　**マルー愛と友情の物語ー**　東京学芸書林　1995年　212p.

ベッシー・ヘッドは1937年南アで生まれた。母は白人上流家庭の出身，父はその家の馬屋番をしていたアフリカ人であったので，母は精神病院に幽閉された。その病院で生まれたヘッドは肌が黒かったので白人ではなくカラードの家庭に里子に出された。実母はヘッドが6歳のとき自殺したが教育資金を遺産として残したので彼女は高等教育を受けて小学校教師となる。しかし，バンツー教育法のもとでは自由な教育が行えずジャーナリストに転身し政治活動にも関わるようになる。その頃ハロルド・ヘッドと結婚して息子も生まれる。だが，60年の非常事態宣言以降政治活動への弾圧が厳しくなり夫はロンドンへ，彼女は幼い息子と共に1964年今のボツワナへ亡命する。

ボツワナに移った後も13歳の時に知らされた出生の秘密は「自分も母と同じようになるのでは」という強迫観念となって彼女を悩ませた。差別と偏見から狂人扱いもされる。その孤独から自分を癒すため彼女は書き続ける。こうして第一作目「雨雲が集まるとき」に続いて1971年ロンドンで出版されたのが本書である。

主人公マーガレット・カドモアはボツワナの被差別民族の子で母は出生直後に誰からも顧みられないまま息をひきとる。そしてその子はイギリス人宣教師に育てられた。教師となった彼女は「環境がすべてであり遺伝なんか無意味だ」という新しい考え方を身につけていたので周囲にも自分の出生を隠そうとはしない。その考え方，勇気が周囲を変えていくという物語である。

マーガレットは「ごく普通の人間でありたい」と願っていたヘッドの化身といえる。これらの作品は国際的に高く評価されたのでヘッドは1979年ボツワナの市民権を獲得する。それは人種，民族，性によって束縛されない「新しいアフリカ人」として生きることへの社会的承認であった。（鈴木陽子）